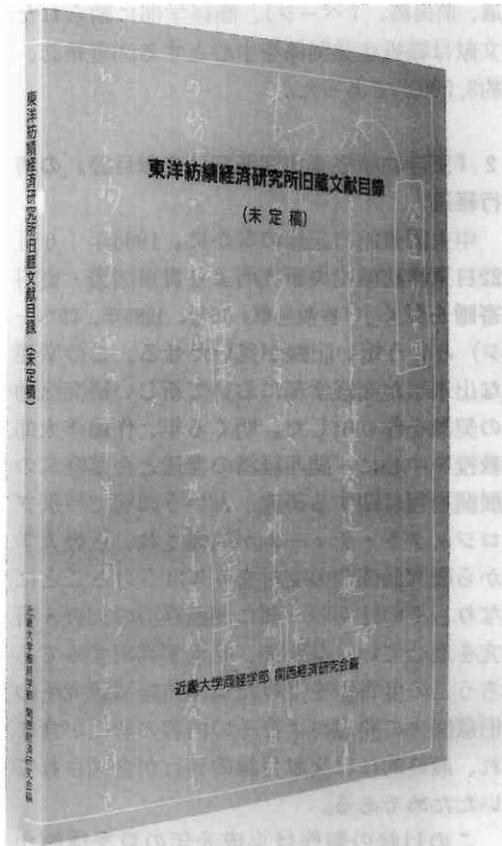


『東洋紡績株式会社経済研究所 旧蔵文献目録』の刊行を終えて

繊維品は、食糧品に次ぐ生活の必需品でありま
すから、われわれは片時もそれを離れて生活す
ることはできないのであります。

— 関桂三述『繊維工業論』昭和27年 —

商経学部 教授 中 村 進



この度、完成した『東洋紡績株式会社経済研究所旧蔵文献目録』。表紙はこの経済研究所の設立に尽力された関桂三氏の著作、『日本綿業論』の草稿をもとにデザインされた。

東洋紡績株式会社（以下、東洋紡と略）経済研究所の蔵書の一部分が近畿大学商経学部
に寄贈された顛末はすでに本学商経学部の作
道洋太郎教授によって本誌において紹介され
た（作道洋太郎「東洋紡績研究所旧蔵文献に
ついて」『香散見草』10号、近畿大学中央図書
館、1988年）。この度、この蔵書の文献目録
が未定稿ながら完成した機会に、再び、この
誌面をお借りして、東洋紡績研究所の旧蔵
書の整理の経過を報告しておきたいと思う。
本拙稿ではまず、この蔵書の贈り主である東
洋紡績研究所の設立の事情とその機能につ
いて簡単に述べ、その後、今般の『東洋紡績
経済研究所旧蔵文献目録』の刊行の経緯と甚
だ主観的ではあるが、その過程で感じられた
この蔵書の特質を記してみたい。

1. 東洋紡績株式会社と経済研究所

1914年6月、渋沢栄一の斡旋により当時の
二大紡績会社であった大阪紡績株式会社（18
82年設立）と三重紡績会社（1880年設立）が
合併し、新たに東洋紡績株式会社が創立され
た。さらに東洋紡は1931年3月に紡績業界の
一大勢力であった大阪合同紡績株式会社（19
00年設立）を合併し、東洋第一の紡績会社
のみならず名実ともに世界最大の紡績会社と
して綿業界に君臨するに至った。（東洋紡設立の

事情に関しては『創立二十年記念東洋紡績株式会社要覧』東洋紡績株式会社、昭和9年、1-11ページ、16-17ページ及び「東洋紡績七十年史」編修委員会『東洋紡績七十年史』[以後、『七十年史』と略して引用]東洋紡績株式会社、昭和28年、139-152ページを参照。）

この東洋紡に経済研究所が創設されたのは1942年であった。すでに設立されていた繊維科学研究所は繊維工業の技術分野の研究を担っていたのに対し、経済研究所は内外の経済諸問題の基本的かつ総合的調査研究を目的として設置された。この研究所は創立当初、繊維産業のみならず、重化学工業その他の重要な産業の内外の経済事情と経済政策の動向などあらゆる方面の経済調査研究を行っていて、所長が重役待遇として迎え入れられ役員会に列し、直接経営に参画していたことから、東洋紡がいかにこの研究所の活動を重要視し、またその成果におおきな期待を寄せていたかが想像できる。

第二次世界大戦後は職制の改革により、経済研究所は社長の諮問機関となり、繊維・経営・産業貿易の三部に分けられ、そこでの研究も繊維産業を中心とする内外経済の基本的研究に集中することになった。このように、東洋紡経済研究所はわが国唯一の繊維会社の専門的な経済研究機関として、学界、官庁、業界などの調査研究と常に緊密な連繋を保ちながら、3万冊を超える特異な蔵書（1952年現在）を背景にして、現実即した調査研究にとくに力を注いできたのである。そしてその研究諸成果は毎月発行されていた『経済研究所月報』に発表され、言うまでもなく各方面から多くの注目を集めた。主にこの月報は国内の繊維産業の現状や主張に加えて、海外の繊維経済事情を解説、紹介していたので、会社内だけではなく、国内、国外の関係方面に広く配布された。その上、経済研究所は、例えば英国綿業委員会が1954年にバクストンで開催した国際会議のために日本代表団の携行する諸資料を作成した風に、必要なときに経済研究所報、調査資料、調査といった形で特

殊研究や緊急調査の結果が公表された。バクストンのための資料は『イエローブック』と称され、内外から高い評判を勝ち取り、経済研究所の研究調査の水準の質の高さを世に問うことになった。（『七十年史』501-503ページ。東洋紡績株式会社社史編集室編『百年史 東洋紡《上》』[以後、『百年史』と略して引用]東洋紡績株式会社、昭和61年、402-403、533ページ。同書、『下』、178ページ。）

1983年になると、経済研究所は東洋紡の機構改革にしたがって経営企画室の中に編成替えされ、研究所が所蔵していた膨大な文献資料は何箇所かに分散された。その一部分が東洋紡の特別のご好意によって阪南大学（約5,600冊）と近畿大学商経学部へ寄贈され（作道、前掲稿、7ページ）、商経学部へ贈られた文献は繊維産業関係を中心とする図書雑誌、約3,500点であった。

2.『東洋紡績経済研究所旧蔵文献目録』の刊行経過

中央図書館日記抄のなかに、1988年「6月22日東洋紡績中央研究所より貴重図書・資料寄贈を受く」（『香散見草』10号、1988年、29ページ）という短い記録が見いだせる。この幸運な出来事が商経学部において新しい研究活動の契機を作り出した。明るる年、作道洋太郎教授を中心に「関西経済の発達と企業経営の展開過程に関する研究」という課題で特別プロジェクト・チームが組織され、近畿大学から研究助成金の交付を5年間受けることになり、その仕事の一部に関西経済の調査・研究を進めていくなかで、絶えず利用するであろうこの度寄贈を受けた東洋紡経済研究所の旧蔵図書の整理およびその内容の解明が含まれ、最終的には文献目録の刊行が企図されていたためである。

この目録の製作は平成元年の夏季休暇から、まず東洋紡から寄贈された100個あまり段ボール箱にはいった約3,500点の文献を開けて、それらを東洋紡経済研究所の蔵書目録と照合し、本学部への寄贈分の書目を点検

し、近畿大学21号館8階共同研究室に設置された合計26の書架(90cm幅、5段)に並べるという作業でもって始められた。次に東洋紡経済研究所の蔵書目録をもとにして、著書や雑誌、1冊1冊にたいして著者、書名、出版社、出版年を記述したカードを作成した。当然のことであるが、このカードは3,500枚以上に達した。さらにカードに一連の架蔵番号が振られた後に、私どもが関西経済研究を遂行していくうえで、便宜的に設けられ10の部門にしたがって、これらのカードが分類された。この便宜上設定された部門はI. 事典(約50冊)、II. 年鑑・統計・総覧(約260冊)、III. 日本の繊維産業(約560冊)、IV. 外国の繊維産業(約790冊)、V. 産業一般(約120冊)、VI. 伝記・人名録(約30冊)、VII. 社史・団体史(約50冊)、VIII. 逐次刊行物(約760冊)、IX. 業界新聞(約130冊)、X. 調査報告書・その他(約520冊)から構成されていた(括弧内の概数は各部門の所蔵冊数合計を表しているが、10部門の合計が3,500冊にならないのは大学紀要などの定期刊行物を『目録』に掲載しなかったためである)。こうして出来上がったカードは50音順(和書)、アルファベット順(洋書)に並べ換えられ、出版社に持ち込まれたのである。最後に、架蔵された各文献には架蔵番号と分類が記載されたラベルが貼られた。

結局、これらの作業の開始から目録完成までおよそ2年半の年月が過ぎ去ったことになり、改めて文献目録の作成には予想以上に時間と人手が必要であるという事実を確認した。この単調で根気のいる仕事に近畿大学大学院商学研究科に在籍中の三島英生氏と商経学部の衣本ゼミ、武知ゼミ、中村ゼミの学生諸君の一部が協力してくれた。

これが東洋紡経済研究所の蔵書の整理とその文献目録作成のいきさつであり、すでに書架に収まった3,500冊余りの図書に仮称ではあるが、“旧東洋紡文庫”と名付けることにした。完成したB5判、本文134ページの『東洋紡績経済研究所旧蔵文献目録』を概観

して、今更ながら、東洋紡経済研究所に所蔵された研究書、書籍、雑誌、年鑑、新聞などの文献が、時代的にも地域的にも極めて広範に渡って丹念に収集されていた点に気づき、驚嘆している。これらの蔵書は時代的に1730年代から1960年代に至る期間に刊行されたものから成り、その研究の対象が地域的にわが国や米、英国をはじめ、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの国々にまで、ほとんど世界的に広がっているためである。だからこそ、今、ここに整理された“旧東洋紡文庫”の蔵書から、繊維産業の研究にこれから取り掛かろうとする人は不可欠で基本的な文献を容易に見いだすであろうし、この領域の一層、深い研究をめざす者は思わぬ貴重な資料を探り当てることが可能であろう。

3. “旧東洋紡文庫”の蔵書

蔵書を整理し、その目録を完成させていく仕事は本の置いてある場所を確かめたり、カードに記載されてある著者や題名や発行年に間違いがないかどうかを調べるために、現物と付き合わせたりするような作業の繰り返しで、それは、常に本と向かい合っていることを意味していた。そしてそのようなかなりの時間に及ぶ“旧東洋紡文庫”の書物や雑誌への正対をとおして、この文庫の特質の幾つかが次第に明らかになってきたように思えた。ともあれこの作業を行っていくなかで、イギリス経済史に関心をもつ筆者の目に止まった諸文献に関して、もう少し、書き綴っていこう。

(1) 関桂三『日本綿業論』について

“旧東洋紡文庫”の蔵書を語る場合、まず、関桂三氏の昭和29年の著作、『日本綿業論』(D-235)について触れなければならない。この労作を最初に採りあげる理由は著者である関氏が東洋紡の副社長時代にこの夥しい数の繊維産業に関係する文献のコレクションを成し遂げた経済研究所の創設に積極的に関与し、この研究所こそは関氏の「學術尊重の表現」(本位田祥男「関さんを憶う」)関桂三氏



1954年に東京大学出版会から刊行された関桂三著『日本綿業論』。関氏の四男、関暢四氏はいみじくもこの著作を「私達への最大の遺産」であったと記している。

追懐録』[以後、『追懐録』と略して引用する][A-349]、関桂三追懐録刊行会、昭和40年、303ページ。また、高田氏は関氏を「東洋紡績経済研究所の当初の育成者であり、……日本の綿業に関する代表的研究者である」[高田保馬「追懐の記」『追懐録』212ページ]と述べている)にはかならなかったためであり、またその著書の序において作者自身が東洋紡績経済研究所の所長や所員の本著作成のための協力に心からの謝意を表していること(関桂三『日本綿業論』東京大学出版会、1954年、4ページ)や巻末に付けられた11ページにもなる参考文献の書目が研究所の蔵書とかなり重なり合っている事情から、『日本綿業論』が完成するまでに東洋紡績経済研究所に集まった文献資料が度々利用されたと推し量られるためである(同書、4ページ。脇村義太郎「関桂三先生と東京

大学『追懐録』387ページ。この脇村氏の論稿は後に『脇村義太郎著作集』第4巻、日本経営経済所、昭和51年に再録された)。おそらく私どもが整理を終えた“旧東洋紡文庫”の諸文献がこの名著が生誕に大きく寄与していたと断定しても間違いのないであろう。ところで“旧東洋紡文庫”には『日本綿業論』と今回の目録の表紙のデザインにも使わせていただいたその草稿(5冊に製本)[C-195~199]や学生のための謄写版刷りの講義録、『繊維工業論』[A-287]が所蔵されている。

この書物の著者である関桂三氏は明治41年7月に東京帝国大学を卒業し、将来の自らの進路を紡績業界に定めた。当時、この大学の実業界からの求人は銀行や保険会社に限られていて、紡績会社の就職を選ぶ卒業生は前例がなく、氏がその最初の人であったようだ。後年、関氏はこの進路選択の理由について、「自分は直接生産の事業、それもなるべく国民生活の必需品を作り、永久性のある産業をと思ひこの道を選んだ。しかし、後に輸出がどんどん増えて、わが国平和産業の根幹にまでなろうなどは、考えてもいなかった」と述懐していた。このような動機で同年、8月に大阪紡績株式会社(東洋紡の前身)に入社した氏はその後、昭和14年に東洋紡の副社長、昭和25年には同会社の会長に就任した。(「略伝」『追懐録』4-5ページ。脇村、同論稿、381ページ。)氏の年譜を見ると、この会社への献身は言うに及ばず、実業界での活躍も極めて多彩であったことがすぐさま了解できるが、その活動は終始繊維事業に挺身、その発展に貢献した点(『追懐録』447ページ。年譜は同書、461-473ページ)に集約されていた。実際、関氏自身も「私は、明治41年に東京大学を卒業して、直ちに繊維業界に身を託し、爾来45年の間、この一筋に繋がって今日に到った」(関桂三、前掲書、1ページ)と書き残している。氏は大正、昭和の日本の繊維産業の発展の推移をいつもその中心の位置から凝視してきて、そうした氏の貴重な経験の所産がまさに東京大学経済学部での講義であ

り、著作であったと言える。

関桂三氏が母校の経済学部で講師として戦後、招かれた事情はこうであった。当時、東京大学では戦後の新しい時代に応じて、講義科目が編成され直し、「産業論」という科目が新設された。この講義は主に業界人によって担当されることになっていて、実際の運用に当たっては講義が二つに分けられ、二人の担当者に依頼することになった。そこで一つは重工業の鉄鋼業から、他の一つは軽工業の紡績業から適任者を呼ぶことが教授会で決められた。交渉の結果、関氏が紡績業の担当の非常勤講師に就任した。(脇村、前掲論稿、383-386ページ。)氏は「財界人の講義に期待するところは決して学究的な経済理論ではなく、長い経験を通じて体得した活きた知識ある」(関、前掲書、1ページ)という大学側の熱心な説得に応じたわけである。そしてじじつ、「長い業界生活の間に身をもって経験体得したところを中軸として」(同書、3ページ)、講義案は練られた。氏の講義は繊維工業論と題され、昭和27年11月5日に開始され、翌年も引き続き行われ、その年は日本綿業論が講義の内容になった(脇村、前掲論稿、386-388ページ)。

この時の「講義の速記を整理したもの」(関、前掲書、1ページ)が昭和29年3月に『日本綿業論』として東京大学出版局から上梓された。定価は780円で、3,000部刷られた初版は即刻、売り切れ、同年8月に再版、1,000部が販売されたが、これとても間もなく品切れになった(脇村、前掲論稿、389-390ページ)。翌年、関氏はこの『日本綿業論』により東京大学経済学部から経済学博士の学位が授与された。その理由は本書が多年紡績業界にあった著者が、日本紡績業を分析し、見解を述べ、学界、業界で種々論議されてきた批判に答えたところにあった。加えて本書は、多年の経験をそのまま論じたのではなく、学問的に昇華され、洗練された文章でそれを表現していたために、その価値を一層高めるに至った。(同論稿、391-392ページ。)同

時に本書において著者は「多年たづさわって来た繊維業界に対する責務」(関、前掲書、2-3ページ)を果たしたのであった。

10講からなる本書の構成を大雑把に記すと、まず序章で経済生活における繊維工業の重要性と世界綿業の沿革が言及され、続いて第2講および第3講は日本の綿織物業の発展とその急速な成長の基本的な諸要因の探索に当てられ、第4講から第8講において日本の綿業の現状とその経済的経営的特質が優れた企業家であり研究者でもあった著者の目をおして詳述され、第9講と第10講で世界のなかで日本の綿業がおかれている状況とこの工

The
Cotton Industry of Japan

By
Keizo Seki, D.S. (Em.)
The main, Head of Division, Textile Spinning Co., Ltd.
President, Keisei Economic Federation



1956年に出版された『日本綿業論』の英語版の題扉

業の将来の見通しに関して著者自身の見解が披瀝されている。

さらにまた、1956年に『日本綿業論』の英語版が *The Cotton Industry of Japan* (C-195) という表題で学術新興会から刊行され、英語圏の国ぐにで新たに読者を獲得した。この英語版に対しても内外で種々の反響が起り、当時、多くの新聞や雑誌に書評があらわれた(脇村、前掲論稿、392ページ)。1958年に有名な経済学専門誌であるシカゴ大学の *The Journal of Political Economy* の

書評欄にもこの本が採り上げられたので、ここではそのJ. B. コーエン Cohen 氏による書評を簡単に紹介することにする。

日本は西欧の国ぐにに比べ、半世紀から1世紀ほど綿織物工業の領域で遅れて出発したが、50年もかからないで、これら国ぐにを捕まえ、凌駕し、今日、世界で最も効率的で最も低費用の綿織物の製造国にのし上がってしまった。コーエン氏はこの発展が20世紀の際立った経済的驚異の一つであるとして捉えて、日本がいかにしてこれを成就し、また、この達成のための諸要因は何であったかを考える場合、これらの問題に対して関氏の著作は答えようとしていると指摘する。

まず、コーエン氏は関氏の既述したような経歴を紹介し、氏がこのような日本の綿織物工業の短期間の飛躍を論じるために、適任であると認める。また、この書物が織物工業の基本的な知識をほとんど持ち合わせていない学生に向けて行われた一連の講義をもとにして出来上がった点も指し示す。10章から組み立てられたこの書物の最後の2章に、つまり日本の世界における綿織物工業の位置とこの工業の将来について著者自身の見解にことさら評者の関心と批判があったようだ。コーエン氏は世界の織物の生産量は着実に成長しているにもかかわらず、綿織物の世界貿易は縮小してきている事実にたいして、関氏の見解は楽観的であると主張する。もとより綿織物工業は常に発展途上国において成長し、また、工業化のために寄与する最初の工業であり、関税による保護も必要とされる。外国の輸入品との競争はそれをおして減少する。インドと日本がこの例を示している。1935年にインドに対する日本の輸出の80パーセントが織物から成り立っていたが、1955年になると、その70パーセントが金属や金属生産物であった。したがって、コーエン氏は日本は綿織物の世界の主導的な輸出国であるけれども、世界市場における日本の綿織物の将来に関する関氏の楽観主義を共有するのはかなり困難であると結論した。(*The Journal of*

Political Economy, Vol. LXVI [1958], pp. 182-183.) この書評の発表からすでに30年余り過ぎていたので、関氏の見解への検証を繊維工業の研究者は今一度試みてみる必要があるようだ。

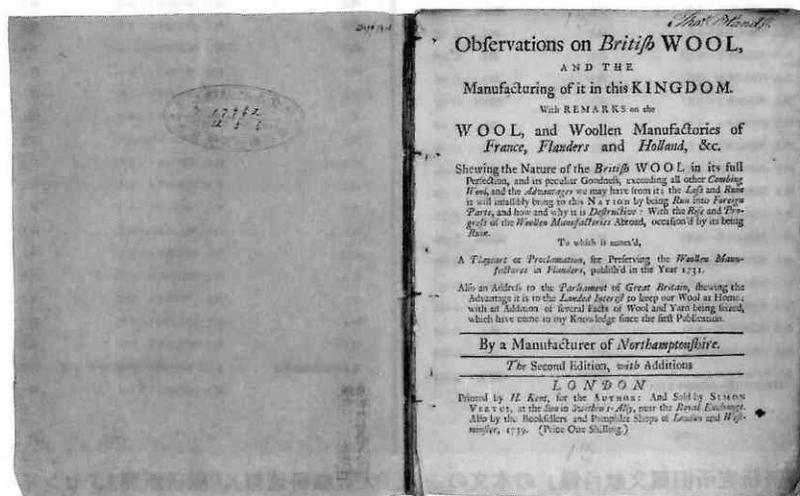
こうした関氏の紡績業界での功績とその尊い経験をとおした学界における業績は氏が自分自身だけでなく、綿業界、繊維業界の誇りと受け止めた昭和30年4月の天皇・皇后両陛下へのご進講の名誉に結実していったのである(脇村、前掲論稿、393ページ、『百年史《上》』551ページ。「略伝」19ページ)。かつてイギリスの経済史家、アシュトンイギリス産業革命期の企業者のひとつの典型として、ジェイムズ・ウォットやジョウサイア・ウェッジウッドのような工場と実験室を頻繁に往き来し、王立協会の会員名簿にも名を連ねていたような人物を描き出していたが(T.S.アシュトン、中川敬一郎訳『産業革命』岩波書店、昭和48年、26ページ)、この実験室を東京大学経済学部の教室や東洋紡経済研究所に、王立協会の一員を天皇・皇后両陛下へのご進行の榮譽に置き換えれば、「何事にも誠実で控え目であり、研究心が強く博識で、心豊かな人」(関公一「父を憶う」『追懐録』394ページ)であった関桂三氏とアシュトンの想定した企業者像が重なり合い、私どもはおぼろげながら企業家としての関桂三氏の姿を掴むことが出来るのである。

(2)経済史、経営史から見た“旧東洋紡文庫”

イギリス経済史の研究者にとっても“旧東洋紡文庫”の蔵書から受ける恩恵は計り知れないものがある。周知のごとく、経済史学は、イギリスにおいてその最初の講座が1910年にマンチェスター大学で設置されたこと(アメリカでは19世紀末にハーヴァード大学)からも瞭然としているように(J.Cannon et al. eds., *The Blackwell Dictionary of Historians*, 1988, p. 118.)、非常に新しい学問分野であった。したがって、今日、イギリス経済史の諸領域で古典と評価され、必読書となっている諸労作が19世紀末から20世紀前半のうち

に精力的に世に送り出された。“旧東洋紡文庫”にはイギリスの繊維産業史研究に際して決して見落とすことの出来ないこうした諸文献が収集されている。例えば綿工業に関しては、A. P. Wadsworth and J. L. Mann, *The Cotton Trade and Industrial Lancashire 1600-1780*, 1931 (C-447), S. J. Chapman, *The Lancashire Cotton Industry*, 1904 (D-482), L.S.Wood and A. C. Wild, *The Romance of Cotton Industry in England*, 1927 (C-454), J. J. Bagley, *A History of Lancashire with Maps and Pictures*, 1956 (C-576) やまた、毛織物工業については、J. Bischoff, *A Comprehensive History of the Woolen and Worsted Manufactures*, 1842 [rep. 1968] (D-687), E. Lipson, *The History of the Woolen and Worsted Industries*, 1921 (D-664), B. Thomas, *Yorkshire, Past and Present*, 4 Vols., N. D. (D-620~623), W. J. Ashley, *The Early History of the English Woolen Industry*, 1887 (D-232), J. James, *History of the Worsted Manufacture in England*, 1857 (D-624), J. Clapham, *The Woolen*

and Worsted Industries, 1907 (D-696) などのような今や繊維産業史と言うよりはイギリス経済史の名著と誉れ高い諸作品が架蔵されていることは喜ばしいし、この文庫の誇りでもある。無論、これらの研究書は今となっては経済史の基本図書としてたいていの大学図書館で館蔵されているに違いない。ここで注目すべきはこれらの書物を、今日の状態とは異なって、希望する欧米の諸文献が全く自由に入手出来なかった混乱の昭和20、30年代に、東洋紡経済研究所が積極的に購入していたという事実である。この時期、西洋経済史では戦後日本が直面した近代化という切実な課題を反映して、封建制から資本制へどのように移行したかという問題が経済史学会全体の大きな論争であって、その論戦の過程で頻りに引き出された毛織物工業や綿工業の学術書がこの研究所に抜き取り揃えられていたわけである。おそらく多くの西洋経済史研究者が欧米の資料の不足を痛感し、これらの不可欠な述作を求めて、各地の大学図書館に文献照会をしていたのであろうことを想い起こすと、当時の東洋紡経済研究所の図書収集能力の卓越性とその確かな経済的裏付けにはただ敬意を表するだけである。



“旧東洋紡文庫”所蔵の最も古い文献であるJ.マンの *Observation on British Wool, &c.* 2nd ed. (1739年刊) という小冊子の表紙。

さらにこの研究所の文献収集の熱意はイギリスの希観書にまで及んでいた。多分、研究所に集められた最も古い書物は1739年に上木されたイギリスの羊毛と羊毛工業に関するJ. マン Munn の *Observations on British WOOL and the Manufacturing of it in this KINGDOM. With REMARKS on the WOOL, and Woolen Manufactories of France, Flanders and Holland, &c.* 2nd ed. (D-572) という小冊子であろう。今でこそこの小冊子は近畿大学総合図書館でも現在定期的に購入中の *Goldsmiths' - Kress Library of Economic Literature* (マイクロフィルム) のなかに発見でき(カタログ整理番号7648、リール番号488)、複写ではあるが簡単に現物に接しられ得るけれど、およそ35年前に極東の一地域でこのオリジナル版が

所有されていたことに感嘆する。どのような必要からこの希観書が購入されたかは知る由もないが、むしろ大切なのは昭和32年に6,000円で東京の古書店から買い受けられ、しかもこの時代のこの金額が当時の上級国家公務員の初任給の3分の2位の価値にあっていたという点(週刊朝日編『値段史年表 明治・大正・昭和』朝日新聞社、1988年、67ページ、51ページなどを参照)である。外国の繊維工業史がその研究や調査の主流を占めていたとは到底考えられない東洋紡績経済研究所が僅か62ページばかりの粗末な印刷物にこのような大金を投入した事態にこの研究所の研究に対する真摯な姿勢と情熱を強く感じ取るのである。

大阪織研速報	大阪織研速報	同発行	昭和42	A-29	織研ジャーナル	織研ジャーナル (昭和39年3-5月)	同発行	昭和39	G-315
同上	同上	同上	同上	A-30	同上	同上(昭和39年6-8月)	同上	同上	G-316
同上	同上	同上	昭和43	A-31	同上	同上(昭和39年9-12月)	同上	同上	G-317
同上	同上	同上	同上	A-32	同上	同上(昭和40年1-3月)	同上	昭和40	G-318
同上	同上	同上	昭和44	A-33	同上	同上(昭和40年4-6月)	同上	同上	G-319
同上	同上	同上	同上	A-34	同上	同上(昭和40年7-9月)	同上	同上	G-320
織研新聞社	織研新聞(昭和41年2-6月)	同発行	昭和41	G-291	同上	同上(昭和40年10-12月)	同上	同上	G-321
同上	同上(昭和41年7-9月)	同上	同上	G-292	同上	同上(昭和41年1-3月)	同上	昭和41	G-322
同上	同上(昭和41年10-12月)	同上	同上	G-293	同上	同上(昭和41年4-6月)	同上	同上	G-323
同上	同上(昭和42年1-3月)	同上	昭和42	G-294	同上	同上(昭和41年7-9月)	同上	同上	G-324
同上	同上(昭和42年4-6月)	同上	同上	G-295	同上	同上(昭和41年10-12月)	同上	同上	G-325
同上	同上(昭和42年7-9月)	同上	同上	G-296	同上	同上(昭和42年1-3月)	同上	昭和42	G-326
同上	同上(昭和42年10-12月)	同上	同上	G-297	同上	同上(昭和42年4-6月)	同上	同上	G-327
同上	同上(昭和43年1-3月)	同上	昭和43	G-298	同上	同上(昭和42年7-9月)	同上	同上	G-328
同上	同上(昭和43年4-6月)	同上	同上	G-299	同上	同上(昭和42年10-12月)	同上	同上	G-329
同上	同上(昭和43年7-9月)	同上	同上	G-300	同上	同上(昭和43年1-3月)	同上	昭和43	G-330
同上	同上(昭和43年10-12月)	同上	同上	G-301	同上	同上(昭和43年4-6月)	同上	同上	G-331
同上	同上(昭和44年1-3月)	同上	昭和44	G-302	同上	同上(昭和43年7-9月)	同上	同上	G-332
同上	同上(昭和44年4-6月)	同上	同上	G-303	同上	同上(昭和43年10-12月)	同上	同上	G-333
同上	同上(昭和44年7-9月)	同上	同上	G-304	同上	同上(昭和44年1-3月)	同上	昭和44	G-334
同上	同上(昭和44年10-12月)	同上	同上	G-305	同上	同上(昭和44年4-6月)	同上	同上	G-335
同上	同上(昭和45年1-3月)	同上	昭和45	G-306	同上	同上(昭和44年7-9月)	同上	同上	G-336
同上	同上(昭和45年4-6月)	同上	同上	G-307	同上	同上(昭和44年10-12月)	同上	同上	G-337
同上	同上(昭和45年7-9月)	同上	昭和46	G-308	同上	同上(昭和45年1-3月)	同上	昭和45	G-338
同上	同上(昭和45年10-12月)	同上	同上	G-309	同上	同上(昭和45年4-6月)	同上	同上	G-339
同上	同上(昭和46年1-3月)	同上	昭和47	G-312	同上	同上(昭和45年7-9月)	同上	昭和46	G-340
同上	同上(昭和46年4-6月)	同上	同上	G-311	同上	同上(昭和45年10-12月)	同上	昭和47	G-341
同上	同上(昭和46年7-9月)	同上	同上	G-310	同上	同上(昭和46年1-3月)	同上	同上	G-342
同上	同上(昭和46年10-12月)	同上	同上	G-313	同上	同上(昭和46年4-6月)	同上	同上	G-343
織研ジャーナル	織研ジャーナル (昭和39年11月-昭和39年3月)	同発行	昭和38	G-314	日本合成繊維新聞社	日本合成繊維新聞(昭和43年8-12月)	同発行	昭和43	G-344
					同上	同上(昭和44年1-6月)	同上	昭和44	G-344

『東洋紡績経済研究所旧蔵文献目録』の本文の一部。『大阪織研速報』、『織研新聞』、『センジャナル』などの貴重な業界新聞や雑誌のバックナンバーが見いだせる。

経済研究所においてその時々の繊維産業の動向を感知するために絶えず利用されたと思われ、現在でも、業界の過ぎ去った事情を生き生きと伝え得る資料は雑誌や新聞の集積である。今回の文献目録のかなりの部分がそれらの資料類で埋められたこと自体、戦前、戦後の繊維産業史及び経済史を扱う研究者にとって、真に幸運であった。とりわけ製本された何種類かの繊維業界紙を、例えばかなり良好な状態で保存されている、昭和30年代初期から40年代中頃までの時期の『大阪織研速報』(A-1~34)や『日本繊維新聞』(G-211~290)、あるいは『センイジャーナル』(G-314~342)などの新聞類に目をやって、それら記事を注意深く追うだけでも、一面的ではあるが、繊維業界をとおして戦後の関西経済史および経営史を掘り起こせると確信できたとき、今後の関西経済研究会の活動においてこれらの新聞・雑誌資料の果たす役割の重大さが判然となった。

おわりに

今、こうして書架に収められた繊維工業を中心に蒐集された“旧東洋紡文庫”の図書を一種の感慨とともに眺めていると、私どもはこれらの大量の文献資料をどのように経済学的に意義づけているのかというかなり根本的な課題が残されているのに気付いた。しかしそれは経済学とは何んであるかという問題と日々の生活における“衣”との関連を探れば、おのずと明白にされるであろう。もとより経済学は何かという問いかけに経済学者は過去において幾つもの解答を用意してきた。その長大なリストのなかには経済学は通常の人びとの生活実践の研究という定義が見当たり(サムエルソン、都留重人訳『経済学 上』岩波書店、1981年、4ページ)、その研究対象が人びとの財とサービスの生産と消費の活動を基礎とした日常生活の現象に根ざしていることが理解される。そしてこの活動はもっと突き詰めていけば、大部分、人びとの衣・食・住にまつわる生産と消費の行動の上に築

かれている点も明瞭になってくる。関氏の東洋紡の入社動機にも看取れたように、何を食べ、どのようなものを着て、いかなるところに住むかという問題は依然として経済生活の基本的な事象なのである。だからそれらは、たとえ時代が推移しようとも、経済学研究の不可欠な研究対象であり続けるであろう。このようにして人間の基本的欲求の一つであり、それゆえに生活の必需品になった“繊維品”(関桂三、前掲書、1ページ)に関連するかなり纏った文献を商経学部の手置き、経済学の様々な角度からそれに関して自由に研究ができるようになった意義は限りなく大きいと言わねばならない。

19世紀の中頃、カーライルは当時の大学の状況に批判を込めて、「今日の真の大学は収集された書籍である」(カーライル、老田三郎訳『英雄崇拜論』岩波書店、1949年、234ページ)と述べ、印刷された書物の中に本来の大学の姿を求めた。大学に集まった膨大な書物1冊1冊が大学であると考える限り、今回の東洋紡から近畿大学商経学部への3,500冊余りの掛け替えのない貴重な文献の贈り物は優れた研究の場としてのこの大学により一層の輝きを与える結果になった。一般に大学図書館の蔵書の質と量がその大学の精神的物質的成熟度を率直に表徴しているという認識は今も変わっていないからである。

(西洋経済史専攻)

